

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.23 2008年11月

政府機関関連への協力	領事シニアボランティアでシドニー勤務 2
	北アフリカ、マグレブの雄アルジェリアの再生を願って 3
	ブルガリアの貿易・投資促進アドバイザー（JICA短期専門家） の活動を振り返って 5
	インドネシアの金型産業の支援活動 6
外国企業支援	“JAPAN AEROSPACE 2008” メキシコ州政府代表を支援して 7
プロジェクトの受託	中東に駐在した人たちの想いー日本人の対中東・イスラム観ー 8
教育	日本貿易会／ABIC／関西学院大学／青山学院大学共催プロジェクト 11
	1. 第2回日米高校生交流の集い
	2. 関西学院大学・高大連携授業 アメリカ理解教育
	初めて大学の教壇に立って 13
	大学・エクステンションセンター（EC）等講師勉強会開催 14
留学生支援	東京国際交流館夏のフェスティバルと秋のバザー 14
エッセー	2の話、2の人生 15
新刊紹介	「ベトナム進出完全ガイド」～ベトナム最新事情と投資貿易実務～ 4
事務局だより	新入会員（正会員）紹介 16
	会員入会のお願い 16

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 403号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

関西デスクは、執務環境の改善と皆様が集まれるスペース確保のため、
少し広めの部屋へ館内移動しました。是非お立寄り下さい。

政府機関関連への協力

領事シニアボランティアでシドニー勤務

外務省領事シニアボランティア

おおすみ くに お
大隅 国雄 (元 伊藤忠商事)

2007年10月2日に外務省の領事シニアボランティアとしてシドニー総領事館に赴任して一年が経過した。商社勤務時代にインドとインドネシアに合計17年間駐在したので、その経験を活かすべく、昨年6月に領事シニアボランティア第2期募集に応募した。2次試験を経て採用通知を受けた時は、ちょうど41年前に大学合格発表で自分の名前を見つけた時のように歓喜した。

ご存知の方もおられると思うが、この制度は民間企業等での海外勤務経験者が在外10公館（ニューヨーク、ロスアンゼルス、パリ、シドニー、ソウル、北京、上海、香港、バンコック、マニラ）に各1名派遣され、領事相談員として邦人援護や各種相談に応じる役割を委嘱される。2009年は更に第3期募集があり、新たに5公館（シンガポール、サンフランシスコ、ホノルル、バンクーバー、サンパウロ）に、各1名が来年2月に派遣される予定である。

日頃の邦人援護の仕事では、紛失・盗難・詐欺・事故・罹病・安否照会など多様な事案があり、所持金を使い果たした旅行者、罹病家族を持つ永住者、ケアハウスに住む身寄りの無い高齢者への対応もあった。

領事相談では窓口、電話、メール、ファックス等で多種多様な相談がある。時には極めて個人的な相談もあるが、これこそ私の務めと受け止めて真摯に相談に応じている。毎月の当館のメールマガジンにも「領事相談員より一言」として、在留邦人の皆さんに日頃申し上げたいことを書いている。特に在留届については、それが無かったために日本からの安否の問い合わせに協力できなかった具体例を挙げて提出をお願いしている。

世界三大美港の一つに数えられ、オペラハウスとハーバーブリッジをシンボルとして持つシドニーは、人口450万人のオーストラリア最大の都市で、2万5千人程の在留邦人



執務室にて筆者



総領事館が入居する36階建てのコロニアルセンター



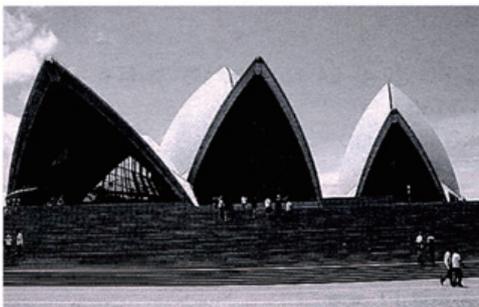
シドニー市内風景 執務室(34階)からの眺め

がいる。今年はシドニー日本人会設立50周年にあたり、記念事業の一つとしてシドニー川柳コンクールが開催されたので、日頃、奇異に写っていた風景を元に「通勤の淑女の足元ゴム草履」という作品を投稿したら図らずも入選した。

2100万人余のオーストラリア全土の人口は、日本の22倍の国土面積に比較すると人口密度が極端に低いが、アジア各国をはじめ多数の国籍者が在留し、更には永住権を得て天然資源開発をはじめとする経済活動の推進力となり、社会全体に目に見える勢いを感じる。英国のエリザベス女王を国家元首に頂く立憲君主制を共和制に変えようとする一部の国民の意見も見え始め、「改革」に取り組む意欲も感じる。北京オリンピックでは、第6位の46個のメダルを獲得したが、その際には街角の大スクリーンの前で連日歓声が沸いた。

領事シニアボランティアの任期は最長3年間であるので、

その間にできる限り在留邦人の皆さんの力になれるように領事相談員としての職務を全うする所存である。更には、私にとって日本、インド、インドネシアに続く第4の故郷と呼べるようにオーストラリアの理解を深めたいと思う。



オペラハウス デンマーク人が皮をむいた蜜柑のイメージで設計、1973年完成。世界文化遺産



ハーバーブリッジ シングルアーチの橋で全長1,149m、世界第2位。1932年完成

政府機関関連への協力

北アフリカ、マグレブの雄アルジェリアの再生を願って

JICA専門家 プロジェクト企画・調査アドバイザー

やはた あきひろ
八幡 暁彦 (元 三井物産)

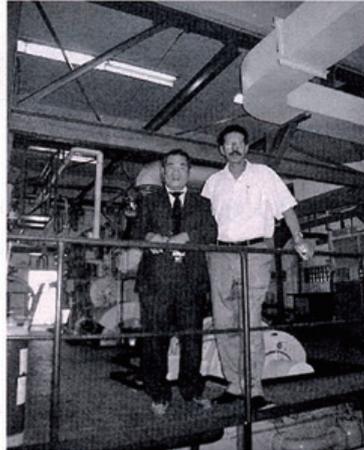
2004年9月からJICAの援助調整専門家としてアルジェリア民主人民共和国の首都アルジェに勤務している。

当国は、アフリカ第2位の面積で日本の約6.3倍もあり、8割強が砂漠地帯、人口34百万人の大部分が地中海沿岸に住む回教（イスラム）国である。そもそもこの一帯は紀元前6、5世紀カルタゴ時代より記録が残り、ティバサ、ティムガッド、ジェミラ等の古代ローマ遺跡が有名である。ローマの後は原住民ともいべきベルベル政権を経て、7世紀にはアラブ人が侵攻16世紀からオスマントルコの属領となったが、1834年にはフランスが併合した。

その後、第二次世界大戦後から独立運動が高まり、1954年にアルジェリア民族解放戦線（FLN）が結成され8年にわたる凄惨な独立戦争を経て1962年に独立を達成した。当初はソ連の緊密協力のもと社会主義路線を推進したが、その後、経済の悪化によりイスラム原理主義のテロが頻発、1998年までの10年間に10万人以上が犠牲になったといわれている。1999年、ブーテフリカ現大統領の就任以来、国民和解策・テロリスト掃討作戦を実施した結果、治安は大幅に改善したものの、最近、マグレブアルカイダ



ブーイスマイル高等海運学校卒業式 毎年、運輸大臣、日本大使を招請して行われる



JICA供与船舶のエンジンの前にて高等海運学校長と筆者

の自爆テロ攻勢が続いており注意を要する。

一方、世界第4位の天然ガス輸出の実績により一人当たりGDPは3,968ドル(2007年・国家統計局)であり、外貨準備も910億ドル(2007年末・中銀)と好調であるが、公式失業率(11.8%・2007年財務省)はともかく、35歳以下の失業率が7割近いと推定されていることよりも社会矛盾が広がりつつあり、テロリストたちの活動が引き続き憂慮される。

日本との貿易は、1960年代後半より炭化水素関連プロジェクトをはじめ大型案件が発注され、最近では5300億円の東西高速道路プロジェクトで鹿島建設をはじめとする合弁会社が700名強の日本人を投入、2010年春の完成に向けて工事中である。

一方ODAにあっては、JICA事務所がない中で「JICA欧州事務所」と連携しつつアルジェリア側と日本との援助協力のキャパシティービルディングを図るべく、援助調整の専門家として小生が駐在しているわけである。

これまでのJICAは、たとえば、1988年から開始し10年のテロによる中断を含んで実施したブーイスマイル高等海運学校、オラン工科大学への協力の2件の他、現在では日本に強みのある分野として環境分野の技術協力を実施して

いる。また、地震防災対策に関する協力や、水産分野の協力として漁業訓練船の供与を水産無償によって行った実績もある。その他、毎年アルジェリア政府関係者を日本での研修に招聘しており、今やその数は500名を超えることとなった。

さて、当地はイスラム国



オラン工科大学
(アルジェリア政府資金で丹下健三デザイン、鹿島建設建築) 式典(2008年3月)



清水大使列席のもと環境省に分析器具を供与した時の式典(2008年3月)

ゆえ「豚」は手に入らないが、エビ、タコ、タイ、マグロなどの海産物が豊富であり、秋には松茸も出回り恵まれている。ただし味噌・醤油等の日本食材は手に入らないため日本ないしパリでの調達ということになる。地場料理としては小麦粉で作った極小米粒に野菜と肉または魚を煮込んだスープをかけて食べる「クスクス」、アラブ式春巻の「ブリック」など日本人好みのメニューが有名である。

アルジェリア人は、隣国のチュニジアやモロッコの調子よさに比べて一般的に田舎者で比較的人がいいという評価で、一度アルジェリアに駐在した日本人達はもう一度アルジェリアに戻りたいというようにアフリカの中では珍しく人気がある。とはいえそこはアラブ、「インシャラー（神の思し召しにより）」と彼らはあたかも「イエス」の意味であるように連発するが、ほとんど「ノー」のいいわけ



地中海の海の幸 獲れた日売り切りのため氷さえ使っていない



アルジェ西方60キロにあるローマ遺跡ティバサ

に使われている。また、1日5回のお祈りを理由にしての弁明、あるいは断食月（ラマダン）中の非効率、さらにさすが1962年までフランスであっただけあって、ばっちり取得するバカンス等等、当方にとって仕事では大いにストレスがたまるということにもなる。

とはいえパリから2時間ちょっとで地の果てアルジェリアに足跡を遺すことができるので、皆様どうぞお越しください。小生は来年9月まで駐在予定なので、その節は必ず小生にご連絡願いたし。

新刊紹介

『ベトナム進出完全ガイド』 ～ベトナム最新事情と投資貿易実務～

会川アジアビジネス研究所代表取締役(元 日商岩井、ABIC会員) 著
カナリア書房刊 A5判261頁 定価2,000円(税別)

著者は98年から6年間、総合商社のベトナム駐在員事務所長として現地の中小企業育成と日本企業の進出支援を手掛け、04年にベトナムに関する経営コンサルタントとして独立した。その生きたビジネス経験、セミナーや講演、個別相談を基に、ベトナムの投資環境を実務者向けに纏めたのが本書だ。

“中国プラスワン”として最も注目されているベトナムだが、最近では、違法ストライキや労働コストの上昇、インフレの進行などで、生産基地としての魅力を低下させる問題が起きている。著者は「アジアの生産基地としてベトナムはまだ無視できない」と指摘。生産拠点としてのベトナムの優位性と問題点、失敗のない戦略的進出方法から、進出に当たっての物流・工場建設・労務・税務管理、ベトナムリスクとその回避法まで丁寧に解説している。

「したたかなベトナム人」「回帰の心」などのコラムもベトナム社会を理解する上で役に立つ。

(2008年9月1日日刊工業新聞新刊欄より)



【構成】

- | | | | |
|-----|--------------------------|------|-----------------------|
| 第1章 | ベトナムを知っていますか | 第7章 | ベトナムの会計と税務 |
| 第2章 | ベトナムの生産拠点としての存在意義 | 第8章 | ベトナムの労働法と労務管理 |
| 第3章 | 日系企業のベトナム進出動向、成功例と失敗例の検証 | 第9章 | ベトナムにおける人材育成と労務管理への提言 |
| 第4章 | ベトナムの加工輸出の特性、委託加工と情報産業 | 第10章 | ベトナムのビジネスリスクとその回避法 |
| 第5章 | 南北ベトナムの特性、物流および工業団地事情 | | |
| 第6章 | ベトナムのWTO加盟と新投資法・新企業法の概要 | | |

政府機関関連への協力

ブルガリアの貿易・投資促進アドバイザー (JICA短期専門家)の活動を振り返って

やまもと けいじ
山本 啓二 (元三井物産)

ブルガリア事情

ブルガリアから帰国後、寄稿の機会を逸していたが、事務局から改めて依頼があり、少し前の話で恐縮ながら執筆させていただいた。

2006年11月より5ヶ月間、私は国際協力機構(JICA)からブルガリア政府の経済・エネルギー省(ソフィア市)に派遣されて、「ブルガリアの貿易・投資の促進」のためのアドバイザーとして駐在した。同国への日系企業誘致、関係強化に関する情報収集・調査・助言が主な目的だった。

ブルガリアは、人口が約770万人、国土は日本の三分の一である。首都ソフィアは、人口120万人で国内で最も多く、市内の車の多さにもビックリだ。交通はトラム(路面電車)、バス、トロリーバスが主な移動手段でどれも混雑がひどい。ブルガリアと言えば、ヨーグルトと大相撲の琴欧州くらいしか日本人には浮かんでこないが、ブルガリアから見ても、日本は東洋の果ての果てで、本当に遠い国である。特産のヨーグルトにはいろいろな種類があり、本当においしい。ミネラルウォーター、チーズ、アイスクリームもいいし、ローズ製品(香水、石鹸、ジュース)は世界一である。しかし、高速道路の開発は遅れているのが目立ち、港湾の整備も急ぐ必要があるようだ。

ブルガリアは、2007年1月1日より27番目の国としてEUに加盟したが、その日は夜遅くまで花火を打ち上げ、TVもこのことを大きく報じていた。ブルガリアの一人当たりのGDPがEUの33%と低く、労働力の流失を心配している。一方、法人税が10%であり、労働の質が高く、賃金も安いことで、EUからの投資の増大も期待される。世界第二の経済国である日本からの投資も大いに期待されている。司法制度の改善、食品の安全等への取り組みが注目されている時であり、EU各国も様子を見ている状態にあ



ソフィア市の中心、国立美術博物館をバックにして筆者

る。今こそ日本企業が先んじて投資する時かも知れない。「衆人みな善をなさば、我独り悪を為せ。天下のことみなしかり」と坂本竜馬も名言を残している。

ブルガリアへの投資促進の期待

ブルガリアは、東に黒海と西にアドリア海を結び、欧州とアジアの中間に位置するため、政治・経済の戦略的な位置にある。ロシアからの石油、天然ガスのEUへの中継貿易国として、益々その重要性が増している。投資環境としての魅力と利点は、バルカン地域ではナンバーワンと言えるだろう。首都ソフィアはギリシャ語で「知恵」と言う意味らしい。ブルガリア人の高い教養と知性は、国際数学コンクールでも優勝していることで証明されている。なお、話しが跳ぶがイエスが「ダ」で首を横に振り、ノーは「ネ」で首を縦に振るので、最初は面食らったものだ。

1991年以降、市場経済への移行を目指し、2005年にはGDP実質成長率は5.6%、鉱工業生産成長率も確実に15%台に伸びて、マクロ経済としての生産性の増加が外国直接投資の増大に繋がっている。情報通信、電子部品、自動車部品、ペトロケミカル分野への投資が求められている。

日本語を教える小中高一貫専門学校があり、日本への関心も高い。しかし、日本からの投資は、残念ながら過去14年間でわずか4,400万ドルで世界からの全投資額の0.3%に過ぎない。輸出入も2005年時点で30百万ドル強とまだまだ微々たるものである。日本企業では、風力発電の建設とワイヤーハーネスの製造に投資が始まったばかりである。

5ヶ月という短期間の滞在であったが、貿易と投資促進のため作成した小冊子『必携 ブルガリア投資ガイド入門』(JICA/ブルガリア経済・エネルギー省共同出版)が両国の経済発展に貢献できれば望外の喜びである。



ブルガリア政府経済・エネルギー省のビル



ソフィア大学の正門前

政府機関関連への協力

インドネシアの金型産業の支援活動

うすい きくお
白井 紀久男(元 サンライズ工業)

2006年8月から7年2月と同年8月から8年2月の2回に亘りインドネシア金型工業会 (IMDIA: Indonesia Mold & Dies Industry Association-IMDIA) へJETRO金型専門家として派遣された。

インドネシア金型産業のほとんどはジャカルタ近郊に集中しており、数人規模の企業も含め

て400社前後で、大手企業に供給できる品質レベルを製作できる企業は50社に満たないと推測される。金型供給元は、日系、韓国系企業が大半を占め、インドネシア地場企業からの調達は進んでいない。

インドネシア金型工業会 (IMDIA) について

IMDIAは、JETRO支援の下、2006年2月に民間主導にて設立された。会員数は181社で、60%が現地企業であるが、日系や韓国企業も加入するグローバルな組織である。さらに幅広い産業分野の企業が加入していることと、日系企業主導ということでも多々ある世界の金型工業会のなかで異色である。IMDIAは、設立時よりインドネシア商工会議所 (KADIN) の傘下にあり、インドネシア工業省とも友好的な関係を保ち、JETROと密接な関係を維持している。更に日本、インドネシア両政府とのパイプを持ち、官民合同で活動ができる優位な組織といえる。

インドネシアの産業力向上には裾野産業の強化が不可欠であり、製造業のマザーツールである金型産業の育成が産業競争力の向上、輸出力の上昇、雇用促進に寄与するとの観点に立ち、IMDIAでは様々な活動が実施されている。

日本の支援

IMDIAの支援要請に対応する日本から可能な支援方法としては、『人』に焦点を当て会員の技術・技能のレベルア



左から筆者、インドネシア工業省アグス次官、ジェトロJKT所長と次長



ップを達成することである。そのため、金型産業の自立的発展を図るために、より有効的に活用する手段としてコア人材 (インストラクター) 育成計画を立案し、プログラム策定・テキスト作成および定例活動指導、事務局機能強化指導等の支援ロードマップが策定された。

その核となるインストラクター育成計画達成に向けての取り組み状況および中・長期計画の進捗状況を確認すべく、2007年8月に着任以降、IMDIAの理事会、委員会、部会に随時出席して活動経過を検証した。その結果、インドネシア人理事、委員夫々が自分の果すべき役割を徐々に理解してきており、発言内容にも2006年度との差が感じられ、大幅に進歩している様に感じた。

さらに、IMDIAでは、会員に対して「モノ作りに対する意識改革」を図るために、見学会、セミナーや交流会等を実施するなど熱心に取り組んできた結果、徐々に理解されつつあるので成果を期待している。

最後に、インドネシア人はとても親日的で仕事に取り組む姿勢も真面目な若者が多い。それと意外に知られてないのは、人口が2億4千万人で国土は日本の5倍もあることである。

また、食事は油が多く辛い物好きで、一度に沢山食べず日に4回位食べること。断食は1か月に及び、朝食は5時までに済ませ、夕食は日没を待って堰を切ったように食していた光景が印象に残っている。



プレスセミナー関係者 (中央筆者)



プレス金型メーカー打合せ 日本人プレス金型専門家鈴木氏と筆者 (左)



金型メーカー見学会

政府機関関連への協力

“JAPAN AEROSPACE 2008” メキシコ州政府代表を支援して

たけやま よしのり
竹山 克則 (元 伊藤忠商事)

メキシコは、(社)日本航空宇宙工業会が4年毎に主催している国際航空宇宙展に、今回初めて参加した(10月1～5日、パシフィコ横浜にて、529社・団体が出展)。

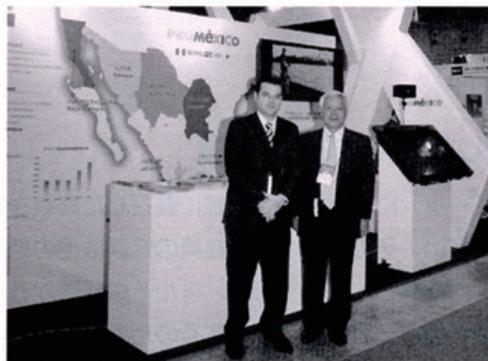
メキシコの航空機産業は、部品の製造・機械加工・機体組立・研究開発など、近年大きく成長し、企業数は186社を数え、対米輸出を柱に今や世界12大供給国の一つと言う(2012～14年を目標にメキシコ製航空機の組立を志向)。

今回30歳代の若手を中心に15名の代表が主要9州から来日し、大使館商務部(PROMEXICO)のブースにそれぞれの州デスクを配置し、「州政府は外国企業にどのようなサポートができるか」来場者にオリエンテーションを行った。

ABICはメキシコ大使館の要請に応え、5名の“BBA”(バイリンガル・ビジネス・アドバイザー)を派遣し、日本企業との取引拡大、企業誘致などについて、州代表の活動を側面から支援した。

9つの州は競争相手だが、日本と違い、他州のことは意に介さず、「わが道を行く」スタイルの行動で、各州の熱意とその対応振りに大きな温度差があり、当初、我々BBAは面食らった。また、航空機模型や製品見本の展示もなく、当初来場者が今一つのためBBAの方も心配になり、せっかく航空機用語集まで用意し張り切って臨んだのにと、正直なところ初めは拍子抜けであった。

航空宇宙産業クラスターがある栃木県や岡山県などの地



PROMEXICO エサウ・ガルサ氏と筆者(右)

方自治体と州政府との提携を進めてはどうかとアドバイスし、州政府代表と自治体ブースを訪ねたが、この種の提携や部品製造に肝心のメキシコ側は興味を示さず、要するに三菱重工業や富士重工業のような大手の航空機メーカーに来て欲しいとする彼らの認識とギャップがあった。

開催期間中は、ブースに詰め名刺を集めるのではなく、せっせと欧州企業のブースを回る州代表、また首都圏の企業を訪ね、精力的に商談に勤しむ州代表など彼らの行動形態は様々であった。この機会を最大限に活用し、ビジネス第一で実質的な行動をする、また来場者への対応も、資料を直ぐに渡すようなことはせず、来場者の関心事、意図をきちんと確かめ、個別具体的に対応する、といったCS(顧客満足)マインドを持って、しっかり仕事をする優秀な若手地方公務員であった。BBAの当初の戸惑いも毎日に消え、州代表と意気投合して楽しい支援が出来た。

ビジネスデー3日目、PROMEXICO ブースは、盛り沢山のご馳走とワインを揃え、レセプションに早変わり、ルイス・カバーニャス大使が対応し、この粋な計らいと「オンリーワン」のプレゼンテーションは会場内の注目を集めた。

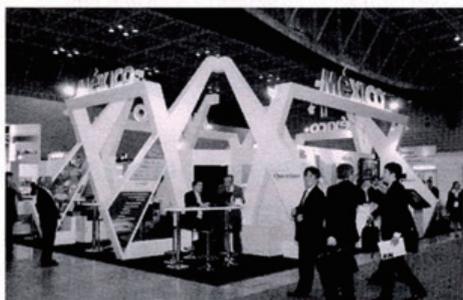
最後に、州代表からまた大使館からも、日本企業との話の進め方などP to Pで学べ、BBAと行動したこの5日間は、有益かつ愉しかったと評価されたことを付記したい。

ABICチーム(敬称略・氏名五十音順)

コーディネーター：西山 勝昭(外国企業支援コーディネーター、元 住友商事)

バイリンガル・ビジネス・アドバイザー(BBA):

グアナフアト州担当	小野 勝彦(元 日立ハイテクノロジー)
ケレタロ州担当	小畑 克之(元 丸紅)
バハ・カリフォルニア州担当	川俣 二郎(元 トーメン)
メキシコ州・プエブラ州担当	竹山 克則(元 伊藤忠商事)
ソノーラ州担当	根岸 史彦(元 丸紅)



左から小畑氏、根岸氏、筆者、小野氏、川俣氏

プロジェクトの受託

中東に駐在した人たちの想い

—日本人の対中東・イスラム観—

ABIC大学講座等グループコーディネーター、一橋大学大学院経済学研究科研究補助員

たにがわ たつお
谷川 達夫 (元 住友商事)

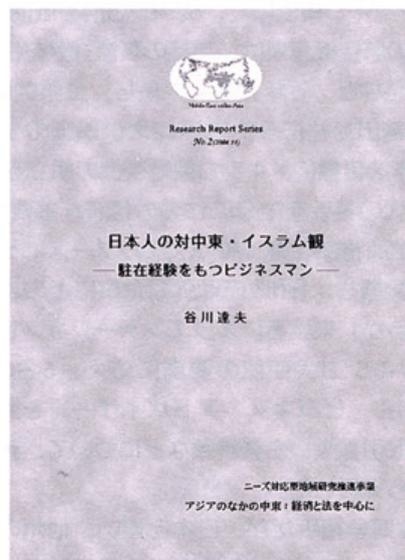
1. はじめに 調査の概要

商社パーソンには世界の各地域に駐在した経験を持っている人が多い。その中で中東駐在員の経験は他の地域に駐在した人の経験とどう違うのか、またその経験からどのような意識を持ちそれがどう変化するのだろうか、という関心を持ち続けてきた。

私は、中東で1979年のイラン革命から1980年に勃発したイラン・イラク戦争にテヘランで遭遇した。その後1982年から86年までイスラムを国是とするサウジアラビアで4年間過ごした。その後、カリブ海のプエルトリコや南米コロンビアに駐在していた時は、絶えず中東の経験と中南米の経験を無意識のうちに比較してきたと思う。また、日本にいる時は勿論であるが、各国の駐在地や出張先でいろいろな人から中東の経験について聞かれ、答えてきた。サウジアラビアから帰国してからは、1997年に出張でドバイに数日滞在したことはあったが、今年イランを27年ぶりに再訪するまで^{*1}中東との直接的な接点はなかった。

2006年に文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の一つである中東地域研究プロジェクトが、ABICの協力を得て意識調査を行うことになり、立ち上がりから参画した。調査の目的は日本と中東の相互理解の促進であり、その一環として日本人の対中東・イスラム観をアンケート調査で明らかにすることであった。内心ずっと温めてきた問題関心に改めて本格的に取り組めるチャンスを得た。そして調査の過程で日本人駐在員の中東に対する想いの50年近い変遷に触れつつ、今まで感じてきたことを再確認することができた。

この意識調査の概要は、ABICのインフォメーションレター No.19 (2007年7月)で紹介しているが、ABICの会員以外に、現在、中東に駐在・居住する人たちの調査を各国の日本人会の協力を得て行った。また今年の中東以外のイスラム教国(インドネシア、マレーシア、パキスタン、



プロジェクトチーム発行の調査報告書表紙

ウズベキスタン、カザフスタン、ナイジェリア)の駐在経験者および現在居住する人にも調査を行った。結果は順次報告書で公表していく予定である。

なお、当プロジェクトのホームページで、調査結果の基礎データおよび単純集計結果を公開しているので参照されたい。<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/research.htm> 本調査の更に詳しい分析は、11月にプロジェクトチームが発行する筆者が執筆したリサーチレポートを参照されたい。

ここで調査の企画段階での印象的なやり取りをご紹介します。調査の概要を決めるための会議が、研究者の間で何回か実施された。そこで議論となったのは、質問の数も多く10頁になる調査票に、対象者のご協力が得られるかということであった。社会調査の常識から言えば長すぎてNOである。ただ私は、中東駐在経験者はその経験を誰かに話したい、あるいは社会に還元したいという気持ちがあると思ひ、その点は心配しなかった。結果的に長すぎるというコメントを戴くことなく、皆さまのご協力を得られた。他の地域向けにこの種の調査を行って同じようなご協力が得られるかは疑問であるが、

*1 ABICインフォメーションレター No.21 (2008年3月発行)にて報告している。

2. 年代別の典型的な駐在員の意識

意識調査の結果を踏まえ、以下の三つの年代に分けて中東に駐在した日本人ビジネスマン像を描いてみよう。従ってこの3氏は筆者が合成して作成した架空の存在で、中東全域の状況を代表しているものではない。

1970年代末までに赴任したA氏

(赴任前) 中近東^{※2}に駐在の辞令をもらった。よく現地の事情も判らず、また南回り路線^{※3}で深夜に3-4ヶ所寄港しながら行く遠い地域への赴任だと不安になる。単身赴任するといつ家族と会えるかわからないし、現地に娯楽も少なそうだから、できれば連れて行きたい。日本食はほとんどないと聞いているので、粉末の豆腐や保存のできるものは大量に持って行こう。娯楽はカセットテープで駐在員が集まってやるカラオケが中心と聞いているので、最新の流っている演歌のテープを持っていこう。

(現地駐在中) 現地事情をもっと知りたいので、できるだけ現地の人と付き合ったり、国内を旅行してみよう。アラビア語(あるいはペルシャ語)も話せるように努力しよう。こちらに来て、新しい中東ビジネスの基礎や現地の人との人脈作りができて、仕事のやりがいもあった。

(帰国後) 駐在中は現地の人と個人的付き合いもして、家族ともども楽しい思い出も作れ、中近東の印象が良くなった。

1980年代に赴任したB氏

(赴任前) 中近東に辞令をもらったが、イラン革命やその後のイラン・イラク戦争が日本で大きく報道されたので、親戚、知人は私が赴任することを非常に心配している。いつ紛争や戦争が起こるか判らないので、できれば身軽な単身で行きたい。日本の自宅は緊急避難で家族を帰さなければいけないかもしれないので、ローンを払い続けるのは苦しいが人に貸さずに空き家にしておこう。中東ビジネスは大きく伸びているので実績を上げてきたい。

(現地駐在中) 日本の報道から想像していたより社会も安定しており、イスラムにも興味を持てる。中近東の生活は制約もありまた治安の心配もあったが、年1-2回家族でヨーロッパに休暇でいけるのが最大の楽しみだ。ゴルフができないので、日本人会で行う会社対抗のテニス大会や気の合った家族と砂漠への旅行などが楽しい。

(帰国後) 現地での仲間と家族同士の付き合いが続いてい

る。いつかもう一度個人的に旅行で行ってみたい。

1990年代以降に赴任したC氏

(赴任前) 辞令をもらったが、世界の他の地域に駐在するのと、特に気分的に大きな違いはない。家族を連れて行こうと思うが、子供の受験競争が激しく、一緒に来るかわからない。日本食もだんだん手に入りやすくなったと聞いているし、現地での医療や健康についても特に心配はない。関空からドバイまで直行便^{※4}で飛び、そこで乗り換えて駐在国に向かうつもりだ。多くの友人や親戚が中東に観光旅行に行きたいと言っている。

(現地駐在中) 先輩からは余り日本から来客がなかったと聞いていたが、中東ビジネスが大きく伸びているので千客万来だ。当地では高層マンション生活で、いろいろなサービスも充実してきている。職場で一緒に働くのは英語を話す外国籍の人が多く、現地語ができるに越したことはないが特に必要なさそう。現地の取引先の会社の経営陣も、世代交代で若い人や欧米で教育受け英語が話せる人が増えている。日本語の新聞も遅れなく読め、テレビも衛星放送で各国の番組が見られる。インターネットや国際電話も接続に問題なく、日本の友人や家族とも常に楽に連絡できる。

(帰国後) 日本のテレビで湾岸諸国の特集番組も増え、日本での中東のプレゼンスは確実に上がっていることをひしひしと感じる。ただ内戦やテロの話や中東のイメージも悪化しがちである。グローバル化の高まりの中で、中東生活も良い経験であったと思う。

3. 現代中東の大きな歴史変化の転換点

なぜ赴任時期によってこのような意識の差が生れたのか、またその意識はどのように変わっていったのかを明らかにすることもこの調査の大きな目的であった。調査結果の分析を、1979年のイラン革命までの時期(以下70年代末までと表記)、その後の湾岸戦争1991年までの時期(80年代)、そして現在まで(90年代以降)の三つに時期を区分して行った。

これは中東の現代史の中で、1979年のイラン革命と1991年の湾岸戦争が非常に大きなインパクトをこの地域の政治・経済に与え、中東に駐在する日本人駐在員の生活や意識にも大きな影響を与えたためである。調査で行った

※2 当時は中近東という呼び名が一般的であった。

※3 PAN AM(パンアメリカン航空)、ルフトハンザ、アリタリア、日本航空などが香港、バンコック、ボンベイ、カラチ、アブダビ、テヘラン、カイロなどを経由してヨーロッパまで飛んでいた。

※4 2002年にドバイのエミレーツ航空がJALとのコードシェア便で、関西空港に直行便を開設した。

質問の分析結果から明らかにその影響が見てとられ、この時期区分でクロス集計して分析したことの妥当性が実証されたと言える。

4. 調査から明らかになった 現地生活の実態や意識の特徴

この調査では、現地の日常生活と職場での経験について調査している。また、現地社会とイスラムに対する印象を赴任前・赴任後・帰国後に分けて詳しく聞いている。ここで調査の全体を見渡し、駐在時期あるいは期間別で変化が見られるいくつかの特徴を紹介したい。

まず家族の帯同であるが、80年代は中東の治安状態の問題から単身赴任が増えた時期である。また90年代以降は子供・配偶者など家族の都合が単身赴任の理由の三分の一を占めて、配偶者と子供の同伴が減少してきている。これは治安状態と言うより、日本での教育問題がかなり影響していると思われる。住居の形態では、一戸建てが90年代以降減り、80年代以降はコンパウンドと呼ばれる集合住宅および90年代以降はホテル住まいが増えている。

日本を離れる前に現地での日常生活に不安や心配があったか聞いているが、大いにあったという人は80年代になって2倍に増えたが、90年代以降はいない。不安の内容では健康・医療面が一番多いが、年代が近くなるにつれ、現地の医療体制が整ってきているので減少している。治安の不安は、80年代に赴任した人が一番多く感じていた。

現地語（アラビア語、ペルシャ語、トルコ語など）の使用頻度と現地の人との交流について聞いているが、先に述べた住居の形態が一戸建てからアパート、フラットやコンパウンド^{※5}、ホテルなどが増えるに従って、現地語の使用頻度が減ってきている。また、中東特に湾岸の産油国では、現地国以外の外国人労働者（expatriateと呼ばれる）が多く、現地経営陣の世代交代も進み、英語が話せる人が増えその使用頻度がますます高くなってきている。もともと現地の人との交流は中東では多くなかったが、日常生活では70年代末までは非常に頻繁にあったという回答があった。しかし、80年代には減少し、90年代以降は持ち直してきている。

現地の生活の楽しさは、厳しい生活環境下でまた社会的

な制約の多いコミュニティで、親も子供たちも精一杯楽しみを見つけ、生活は楽しいものであったと回答している人が70年代末までは70%を超えている。80年代は治安の問題から低下している。世界のほかの地域と比較してみたいところである。

仕事のやりがいについては、全ての年代を通して80%近くあったことは印象的である。自由記述からは、担当地域の売上高や利益などの実績に密接に関係していることが読み取れた。中東とのビジネスの歴史を見てみると、70-80年代は、中東は第一次の石油ショック以降の収入増により、社会インフラ建設ブームの状態、商品もいわゆる輸出全盛時代であった。従って当時の関係者は大きな契約を受注する機会も多く、全社的な業績に対する貢献意識も強く、売上高や利益面で他地域に比べ大きな実績を上げていたので、仕事のやりがいを大いに感じていた時代と言える。

ビジネスのやり易さでは、80年代まではあまり変わらないが、90年代以降グローバル化の進展で、また現地経営者の世代交代などで、中東特有のビジネス習慣も西欧化され、やり易くなってきていると意識されつつある。

現地社会やイスラムについての印象は、赴任前・赴任後・帰国後で意識が変化している人が多く興味深い。赴任前の現地の印象は、徐々に悪くなっている。これに対し赴任後、現地に住んでみての現地社会に対する印象は、いずれの年代でも50%以上の人が良くなったと答え、悪くなった人に比べて圧倒的に多い。イスラムに対する印象は、赴任前はどちらとも言えないという人がどの年代にも約70%いる。赴任後は良くなったという人が全体で約35%で、悪くなったという人は5%以下である。赴任前の知識や情報は正確でなく、赴任して初めて現地社会やイスラムの現実を知り意識が変わったと述べている人が多い。このことから現地社会で生活し、イスラムの知識を増やし交流することは、確実に好意度を上げていると言える。

この調査で中東の日本人駐在員の生活の特徴を少しでも明らかにしようとしてきた。また今後、日本と中東との意識のギャップをどう埋めていったらよいかについての示唆を得ることができたと思われる。このプロジェクトは引き続き平成22年度まで研究活動を続けるので、結果を順次公表していく予定である。

※5 外部を塙で囲って主に外国人家族だけが居住する集合住宅。ゲートド・コミュニティ（タウン）とも呼ばれる。

教育

ABIC・関西大学共同プロジェクト

日本貿易会／ABIC／関西学院大学／青山学院大学 共催プロジェクト

1. 第2回日米高校生交流の集い

日本貿易会並びにABICは関西学院大学（7月25日、26日）、青山学院大学（7月27日、28日）と第2回高大連携プログラム「日米高校生交流の集い」を開催した。

今回は、アメリカからの留学生を主体にヨーロッパ、カナダからの留学生も参加して、アメリカ理解を主題にしつつよりグローバルな視点も加え、大学生ボランティアが企画から運営まで中心的役割を担い、大学教授、社会人が側面支援を行う産学協同の試みとして、日本とアメリカ、ヨーロッパの高校生が寝起きを共にし、語り合う交流の場を提供した。

米日財団の支援に加え、関西は在大阪・神戸アメリカ総領事館、民間国際教育交流団体のAFS大阪支部、関東は米国大使館・広報文化交流部、AFS日本協会東京支部が協力団体に参加した。

関西（7月25日～26日）

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで、「本音で語るアメリカ文化論」を主題とし「お互いを知る大切さを発見しよう～世界平和への第一歩」を副題にグループ討議と討議結果の発表をした。

参加した高校生は、兵庫県立宝塚西高等学校、大阪府立箕面高等学校、私立啓明学院高等部、兵庫県立国際高等学校、大阪府立千里高等学校、関西学院高等部から日本人38名、アメリカ、カナダ、イタリア、スペイン、スウェーデンから来日中のAFS交換留学高校生13名の計51名、リード役は関西学院大学生・AFSボランティアの大学生計17名。

初日は、大高博美関西学院大学教授の開会挨拶に続き在大阪・神戸アメリカ総領事館からのメッセージ、グループ関西学院院長の「My Dreams for US-Japan Relations」と題した基調講演、フルブライト留学大学院生の基調講演、昼食後のスキット寸劇、グループディスカッション、夕食後のダンス・レクリエーションで親睦を深めた。



関西 最優秀として表彰されたグループの発表

2日目は、午前、午後各1回グループディスカッションを設け、グループごとに英語による発表会に臨んだ。野村哲三ABIC会員（元三菱商事）から各チームの発表会講評と結果発表があり、最優秀チームに名鏡ABIC事務局長から表彰並びに賞品が授与された。その後、大高教授による修了書授与・講評の後、日本貿易会三幣常務理事兼ABIC理事長の開会挨拶を以って無事閉幕した。

関東（7月27日～28日）

丸紅の協力により丸紅多摩センター研修所で、「Share the future」を主題に、「どんな世界であってほしいか」を副題としてグループ討議をした。

参加した高校生は、横浜市立横浜商業高等学校、東京学芸大学附属高等学校、青山学院高等部、埼玉県立浦和高等学校、神奈川県立相模原高等学校、私立横須賀学院高等学校から日本人28名、アメリカ、カナダ、イタリア、スペイン、スウェーデンから来日中のAFS交換留学高校生16名の計44名。リード役は、青山学院大学大学生・AFSボランティアの大学生の計10名。

初日は、日本貿易会天野正義専務理事の開会挨拶の後、青山学院大学学長室の濱本嘉郎氏の歓迎の言葉、藤田卓ABIC会員（元丸紅）の「America seen through Major League Baseball (MLB)」と題したスピーチが続いた。午後は夕食前まで2回グループディスカッションを行い、夕



関東での参加者



関東 藤井会員による英語落語

食後スポーツレクリエーションで汗をかいてから3回目のグループディスカッションに移った。

2日目、午前中グループディスカッションを1回行った後、アメリカ大使館広報・文化交流部のレベッカ・ハーモン氏が「Make the Future Count—Some numbers to think about」と題する興味深い英語スピーチを行った。昼食後、まとめのグループディスカッションを経てグループごとに英語で発表。閉会式は、AFS第一期生でもある藤井健一朗

ABIC会員（元新日本製鐵）演ずる英語落語で閉幕した。参加者全員による投票で最優秀グループを選び、名鏡ABIC事務局長から表彰ならびに賞品が授与された。続いて長谷川信青山学院大学副学長による講評、三幣日本貿易会常務理事兼ABIC理事長の閉会挨拶、参加者全員の記念撮影後、交流会を経て散会した。

（日米高校生交流の集い担当 おおにしとしお かくいのぶゆき
大西 俊男、角井 信行、
かわまたじろう
川俣 二郎）

2. 関西学院大学・高大連携授業 アメリカ理解教育

2006年パイロット授業として始まった高大連携授業は、昨年、関西学院大学の正規講座となった。2年目となった今年は担当の藤沢教授の発案でdebate方式が採用された。アメリカ理解教育を進めるとともに、両国の様々な比較を題材にしつつ、発言力が弱いとされる日本人のディベート能力を高めることを狙いとしたもので、大変時宣を得た取り組みとなった。8月5日～7日の3日間にわたり、関西学院大学上ヶ原キャンパスにて実施された。

【講師陣容と基調講演】

関西学院大学 藤沢武史 商学部教授

「米国の観光地と観光産業—日本人との対比」

同 中条道雄 総合政策学部教授

「米国の大学と高校の教育制度—日本と対比」

摂南大学 家本真実 専任講師

「アメリカの音楽のユニークさ—日本と対比」

ABIC 藤田卓会員

「アメリカMLBと日本プロ野球との比較」

村井勝会員

「米国企業の統治構造—日本企業との比較」

野村哲三会員

「アメリカ人の愛国心—日本人との対比」

【受講生】大学生9名、高校生16名（関西学院高等部、啓明学院高等部、宝塚西高等学校、箕面高等学校）

ディベートのタイトルは、①愛国心の日米比較、②観光地日米比較、③ミュージック日米比較であった。大学生と高校生の混成で、「Yes」班と「No」班各3チームの計6チームを編成した。この授業は、担当教授・講師だけではなく同学の大学生も高校生を指導するというリーダーシップ



ディベート大会



参加者記念撮影



野村会員の基調講演

養成の場として、また、大学生と高校生が共に研究命題につき協力して問題解決に当たるというところに本講座の特徴と意義がある。一つの共通問題を掘り下げ論理的かつ具体的に論じる能力と、プレゼンテーション・スキルとディベート能力の基礎を身につけることを目的としている。

今回は、初めての試みとして講座の前に事前補講を用意した。初めてディベートに取り組む高校生が大学生を交えてのディベート方式の講座に容易に溶け込めるようにするのが目的である。ABICのプロジェクトメンバー4人が、野村哲三会員（元三菱商事）をキャップとして、事前に数回の準備をし、また、ディベート経験のある大学生の参加も得て、要望のあった宝塚西高等学校、箕面高等学校で実施、両校の先生、生徒にも大変好評で感謝された。

ディベート大会は、最終日に2時間にわたり、6チームが熱戦を展開、最優秀チームには名鏡ABIC事務局長から賞品が授与され、藤沢教授から高校生に高大連携授業の終了書が手渡された。当日は、浅野孝平副学長、矢倉達夫教務部長も出席され、天野正義日本貿易会専務理事の閉会挨拶があり、3日間の夏季特別講座を成功裏に終了した。

（関西デスクコーディネーター おおにしとしお
大西 稔男）

教育

初めて大学の教壇に立って

2008年6月11日、青山学院大学青山キャンパスに於いて、非常勤講師として講義をすることとなった。「公園デビュー」ならぬ「キャンパスデビュー」である。ABIC特別講座として実施されている「国際ビジネスと海外事情」の一環に「知られざる米州事情とビジネス」があるが、その中の『米国の観光ビジネス』について語る機会が与えられたのである。

私は長年旅行業務に携わってきたが、特に米国との関わりは、ニューヨーク勤務時代から現在まで30年以上続いている。『旅』を取り扱うビジネスは、人々に「喜び」、「感動」、そして「夢」を与える、楽しくかつ華やかな特性があるが、事業となると大変熾烈な競争を繰り広げる。米国勤務の1970年後半、すでに観光産業全体は大きく航空会社が主導しており、旅行商品は元より観光目的地の開拓もその手に委ねられ、一方、新鋭旅客機の大量購入や路線拡大など華々しく事業が展開され、米国産業界で優勢であった。私も代理店の立場からその一翼を担い、随分業界事情を知ることができた。

しかし、環境は激変。『航空業界規制緩和』と『空の自由化政策』により、あの世界最大のPanAmが倒産、有力老舗航空会社も低迷し、航空業界を含め観光産業全般が冬の時代を迎える。加えて二度のオイルショックと湾岸戦争、そして9月11日の同時多発テロとそれに続くイラク制裁の戦いは、この平和産業を直撃した。このような状況下、サウスウェスト航空が不死鳥のごとく現れ、良質のサービスとユニークな経営戦略で高収益を上げるという劇的な展開を繰り広げることとなる。所謂、ローコスト・キャリアの出現である。

航空業界の長期的な不振は必然的に旅行業界にも波及し、密接な関係にあった両者は、コミッション・キャップあるいはカット政策が打出されることで激変し、航空券代売の多くの航空代理店は廃業する。余力のある旅行会社は、この危機的な収入減を補うため、法人顧客に対し、出張経費の削減提案を行い、その対価としてトラベル・マネジメント・フィーを得ることとなる。現在、米国の企業の大半は、トラベルポリシーを設け、トラベルマネージャーの管理の下、大幅な費用削減を目指している。これらのコーポレート・トラベル会社は間もなくグローバル企業へと発展する。

この産業に最大の影響を与えたのは、情報通信技術（IT）の発展による流通の大変革である。インターネットの出現で旅の素材が直接消費者に販売される中抜き現象が起きる一方、新たに異業種が参入するなど大きな変化が生ま

こだま まさひろ
児玉 正博（元日本通運）



ニューヨークのアップタウンにて（2008年10月10日）

れた。また、航空業界では、経営戦略構築においてIT戦略は欠かせない重要な要素となっている。

私は体験を通じこれらの出来事を話すつもりでいたが、果たして上手く説明できるのか、講義が近づくにつれて不安が増してきた。4月上旬、キャンパスツアーが実施され、森、布施両コーディネーターのご案内で、講師控室や講義室を見学する機会があり、また、先輩講師の方々からもレジメ作成の要領や講義の様子を伺い、気持ちもずいぶん軽くなった。レジメは簡潔に、講義は写真や表を活用し、できる限り単調にならないことが鉄則とのこと。

講義当日、教室は若干蒸し暑い。案外冷静でいられた。学生数は60名強、三、四年生が対象のため就職活動の影響か。また、女子学生が多いのに驚かされた。国際情勢やビジネスに関心を持ってくれることは喜ばしい。講義はイメージ通り順調に進んだが、懸念した通り残り15分が戦いとなった。盛り沢山の内容を反省しながら何とか終了したが、不慣れな講義を皆どのように聴いてくれたのだろうか。講義中は私語もなく、よく聴いてくれていたように感じたが、レポートの反応が恐ろしかった。

10日後郵送されたレポートを急いで開封、ランダムに目を通して安堵、危惧するまでもなかったのだ。多くのレポートが私の意を解してくれたのか、的確な内容で考察が書かれていた。インターネットをコピーしたと思われるものもあったが良くできていた。印象的なものに、留学生の英文レポートがあり、綺麗な英文とともに『規制緩和の功罪』あるいは『エコツアーと地球環境問題』では、広範な問題意識と見解が述べられ優れたものであった。

私の拙い講義は学生諸君の良質な思考力と誠実さによりどうにか様になったようだ。再び、このような機会が得られることを願い、また、もっと自己研鑽し質の高い講義ができれば、と思っている。

教育

大学・エクステンションセンター(EC)等講師勉強会開催

ABICでは新入会会員で「大学講座の活動に興味あり」と記入された方を対象に「講師をするための勉強会」を開催している。

今年は去年に続いて2回目を8月1日、日本貿易会会議室にて下記の内容で開催した。なお、今後の参考として講師



体験談(本号13頁参照)を児玉正博氏(元 日本通運)に話していただいた。

会員22名参加。
司会(恩田 英治)

1. 大学・EC等への講座提供の現状説明(森 和重)
2. パネル・ディスカッション: 最近の大学事情、学生気質、講座内容の変遷、シラバス策定と期待される講師像について(増田政靖、谷川達夫、布施克彦、森和重、猪狩眞弓)
3. (1) 講義におけるビジュアル・エイド活用の事例紹介、アイ・コンタクトの必要性および(2)「著作権の概略」について(猪狩眞弓)
4. 講師デビューに向けて、やってみたいテーマ提案、質疑応答
注:()内は担当した大学講座等グループコーディネーター
(大学講座等グループコーディネーター 恩田 英治)

留学生支援

東京国際交流館夏のフェスティバルと秋のバザー

留学生とその家族約1,000人が住む東京国際交流館では8月9日(土)に夏のフェスティバルが、また11月8日(土)にはABIC肝いりの秋のバザーが開催されました。これまで秋に開催されたフェスティバルと7月に開催された盆踊りを合体させて、今年は夏のイベントとして生まれ変わりましたが、バザーは9月~10月に入居する留学生の便宜をはかって秋に開催されました。

夏のフェスタは3,000人を越える参加者を迎えた大規模のものになりました。各国紹介の絵画や民族衣装の展示や試着会、環境問題の講演・討論、各国・地域の文化紹介、日本伝統工芸の紹介、子供が楽しめるイベントや動物とのふれあい広場、各国料理紹介の屋台、世界や日本の遊びの紹介・体験、ダンスや音楽のステージパフォーマンスなど盛りだくさんのイベントが終日続き、夕刻からは中庭に設置された櫓を囲んで留学生も一般参加者も一緒になって盆踊りを楽しみ、最後はキャンプファイアーと充実した一日を過ごしました。

ABICは、講師の先生方や普段の教室で習っている留学生達に加え、ボランティア参加の方々の協力を得て、茶道、華道、書道の展示やデモンストレーションと留学生や一般参加者向けの体験教室の運営を担当しましたが、茶道、華道、書道の体験コーナーではそれぞれ120名、100名、70名を越える多数の参加者があって、関係者は忙しさに嬉しい悲鳴でした。

バザーは、商品のほとんどがABIC会員、日本貿易会およびメンバー会社社員の方々の提供によるもので毎回好評を博していますが、今回も260口を超える荷物で送られた品物をご寄贈いただき、その売り上げは30万円を超えました。ご支援いただいた皆様に深く感謝申し上げます。また商品の仕分け作業と当日の販売には学生から多大の協力がありました。売上金は従来通り交流館の留学生支援に当てられます。

(留学生支援グループコーディネーター 田中 武夫)



華道体験教室



書道体験教室



留学生支援バザー

エッセー

2の話、2の人生

あつら たかゆき
厚浦 孝之 (元 伊藤忠商事)

最近、夫婦二人で旅をする『夫婦で旅する秘湯日記』を著者：孝之・はるみの連名で出版した。二人三脚で全国156箇所の秘湯を訪ね、折々に書きとめたものをエッセー風に自分史としてまとめたものである。丹羽宇一郎伊藤忠商事会長からの激励文も載せさせていただいたが、256頁の本を書き、皆に読んでもらう大変さを3年半の取材と半年の原稿校正で実感している。同時に心身ともに健康だからと感謝している。

思えば60歳定年5年前に歯茎から出血し止らず、死ぬかと思った。商談先から慶応病院に担ぎ込まれ、糖尿病と診断された。1600キロカロリーに制限された苦しい戦いを二人で戦った。四国遍路はフランス人の友人に四国の仕事現場で教えられ、日本人として無知と無関心が恥ずかしく、定年後に絶対やってやるとした計画だった。この巡礼を前倒して実行した。ひょっとして60歳前に人生が終わるかもしれないからだ。1400kmの八十八箇所の巡礼は現役だったので、2年都合10回の区切りうちで満願達成した。その時の涙は忘れられない。遍路で接待されたトマトは、銀座の接待しか知らなかった小生の人生観を全く変えるものであった。

その後、これも二人で東海道を東京から京都まで歩いた。そんな時に出会ったのがABICである。社会貢献とかボランティアに漠然と興味があった。ワールドカップ横浜の外国人アテンドのボランティア、タイ留学生のホームステイ、東京国際交流会館のバザー、そして国連WFP協会のエキスペリエンスボランティア(略称EV)と続いた。国連WFP協会のEVは、世界の飢餓を救うため民間から国連を支援する活動で、今も様々な展開を前線で行っている。

本年6月に宇都宮大学、7月に創価大学でABICから

「NPO活動の現場から」の講演を依頼され、多くの学生に講義する機会を得、また8月に横浜港湾協会で同様講演をした。

ABICそして国連WFPこの二つは小生の生きがいの両輪である。先週、横浜ベイスターズは200万円の寄付を協会にしてくれた。かつてのエース佐々木の背番号は22で、小生は「22」とか「2」が気に入っている。平成9年2月22日にホールインワンをしたが、ボールは2番だった。不思議なことが起こるものである。

ABICの留学生支援グループコーディネーターに就任したのが今年の4月である。隣の席に去年、『男なら、一人旅』(PHP新書)を出版された大学講座グループコーディネーターの布施克彦さん(元 三菱商事)がおられた。この本を読むうちに自分の本は『旅は二人旅』にしようと仮に決めた。夫婦の二人に始まりABICと国連WFPの両輪で数々の感動を頂いた「2」にこだわる自分である。(我が名前の厚浦とは中国語で“ホーパー”でリリーフの二番手投手の意。野球の好きな小生は小学生のとき下手投げのリリーフだった。)

『秘湯日記』が出来上がり、ABICが東京国際交流会館で留学生に日本語指導している「日本語広場」の上級クラスの二人(韓国人と台湾人の男女)に恵存した。彼らの感謝感激の様子は表現できないくらいだった。これまでの苦勞が報われ、これまで出会った皆様への感謝で一杯になった。これからも「2」の人生を充実して歩んでいきたい。



ABICの大学講座 創価大学での講義 (08年7月14日)



WFPのチャリティイベント「ウォーク・ザ・ワールド FOR アフリカ」(08年5月25日 横浜)



四国八十八箇所遍路 満願成就

新入会員(正会員)紹介

個人正会員 7月入会 佐々木 幹夫氏 (ABIC名誉会長、三菱商事会長)

法人正会員 8月入会 岩谷産業(株) (日本貿易会常任理事会社)

会員入会のお願い

国際社会貢献センター (ABIC) の活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 — —

正会員

団体・法人 (17社)	(社名五十音順)			
〈17口〉 (社)日本貿易会	伊藤忠商事(株)	住友商事(株)	双日(株)	
豊田通商(株)	丸紅(株)	三井物産(株)	三菱商事(株)	
〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ				
〈2口〉 岩谷産業(株)	稲畑産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)	
〈1口〉 協同木材貿易(株)	興和(株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶理(株)	
個人 (7名)	(敬称略・入会順)			
池上久雄	寺島寛郎	小島順彦	宮原賢次	吉田靖男
				岡素之
				佐々木幹夫

賛助会員

法人 (2社)	(社名五十音順)
(有)イーコマース研究所	キーリサーチネット(株)

個人 (354名)

下記は2008年7月以降ご登録お申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈3口〉 井上邦彦			
〈2口〉 肥後照雄	藤井吉郎	松村茂	
〈1口〉 出羽正義	一色修二	伊藤裕基	今井明良
内川博文	大西秀雄	岡本正	小澤清水
小野勝彦	片野無事生	神谷誠一	北詰良三
絹巻康史	木村滋	久保山毅	塩野寛次
高田忍	竹下浩	竹山克則	千葉紘
梨本進	西村寿浩	根岸史修	福島斉
古瀬輝明	堀江博	松田洋三郎	味田村正行
武藤滋郎	村井靖武	村上哲良	森川建夫
吉田泰興			

活動会員 1,841名

(2008年11月5日現在)